浄土真宗でのお盆(盂蘭盆会)って？

お盆についてのとらえ方は、宗派や地域性によって様々ですが、世間一般でよく聞くのは、「8月の13日になると、地獄のカマの蓋が開き、霊魂が帰ってきて、15又は16日にまた戻ってゆく」或いは、「迎え提灯を準備していないと故人が迷って帰って来られなくなる」などでは？

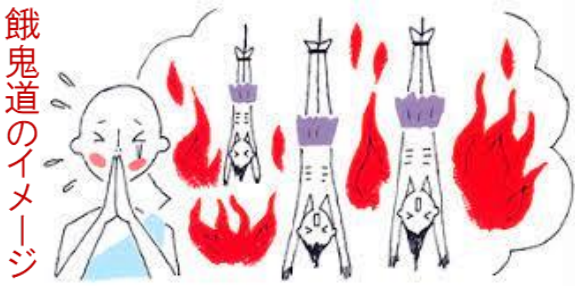
しかし、仏教において本当にこのようなお盆のとらえ方でよいのでしょうか。

私たちの大切な亡き方々は、果たして地獄に堕ちているのでしょうか？期間限定でしか帰って来ない存在なのでしょうか？

お盆という仏事は「仏説盂蘭盆経（ぶっせつうらぼんぎょう）」と言うお経の話がその由来となっていると言われます。

「盂蘭盆経」によると、釈尊の仏弟子の一人で神通第一の目連尊者がある時、亡くなった母親が良い暮らしを送っているのかをその神通力というどこでも見通せる力をもって探したところ、六道という迷いの世界の一つである「餓鬼道（がきどう）」に堕ちて苦しんでいる姿を見たそうです。

餓鬼道という世界は、空腹を満たすために食べ物を口元に運んでもその直前で全て炎となって消えてしまい、飢餓感や空腹感が満たされずに苦しみ続ける世界です。


餓鬼道のイメージ

さながら逆さまに吊り下げられる倒懸（とうけん）の苦しみだと言います。

インドの言語では倒懸をウラバンナといい、盂蘭盆とはこの梵語を音写したものです。

何故、目連の母が餓鬼道に堕ちたかというと、生前我が子目連のみを溺愛し過ぎる余り、他の人やものをないがしろにしたために餓鬼道に堕ちたと言われています。

目連は嘆き悲しみ、何とか母を救いだそうとし何度も神通力により食物を差し出しますが、口もとまで運ぶと同時に炎となって燃え尽き、救うどころか逆に苦しみは深まるばかりであったそうです。

そこで目連は、釈尊に救いを求めますと、「7月15日（旧暦）に安居（あんご＝修行、勉強会）を終えた僧侶らに盛大な法要を営んでもらい、その後僧侶らに敬いや感謝の心で施しなさい。そうしたら母は救われるであろう。」と説かれたそうです。

この通りに目連が実践したところ、餓鬼道で苦しむ母は浄土へ救われたそうです。

この経典の真宗的味わい方ですが、まず一つは、人は仏法によってのみ、本当の意味で救われていくのだと言うことです。

目連のような方の母であっても餓鬼道という世界に堕ちていくということは、実は目連の母だけの話ではなく、目連の母と同様に、私たちの心は餓鬼道に堕ちていても当然のような日々を送っているのだということです。

私たちは、他の尊い命を大切にしなければいけないのだと思っていても、他の命を奪ってしか生きていけないのが私たちであります。

そのことを日常私たちは忘れがちであるからこそ、盂蘭盆という仏縁の機会を恵まれ、自らの日々の生き様を顧みるとともに生かされている命に感謝を噛みしめるというとらえ方が浄土真宗におけるお盆のあじわい方なのです。

尚、釈尊の教えに従った結果、目連の母が救われてゆく様を見て目連は踊り喜んだそうですが、それが現在の盆踊りの由来とのことです。